

岩波講座

# 文学

3

言語

岩波書店



岩波講座 文 学

3

言 語

岩 波 書 店

### 〈執筆者紹介〉

- 寺田 透 (てらだ とおる) 1915年生 文芸評論家 『道元の言語宇宙』『ことばと文体』
- 田島 節夫 (たじま さだお) 1925年生 哲学 『言語と世界』『構造主義と弁証法』
- 西本 晃二 (にしもと こうじ) 1934年生 フランス・イタリア文学 「セバスチャン・カステリオ『異端者について』覚書」バルザック『従妹ベット』(『世界の文学』)(訳)
- 足立 和浩 (あだち かずひろ) 1941年生 思想史 デリダ『根源の彼方に—グラマトロジーについて』(訳) ドルーズ『ニーチェと哲学』(訳)
- 宇波 彰 (うなみ あきら) 1933年生 哲学 『言語論の思想と展開』ドルーズ『ブルーストとシーニュ』(訳)
- 竹内 成明 (たけうち しげあき) 1933年生 コミュニケーション論 「言語における〈疎外〉と〈物象化〉の問題」「ブルードンのコミュニケーション論」
- 竹内 芳郎 (たけうち よしろう) 1924年生 哲学 『言語・その解体と創造』『国家と文明』
- 福田 定良 (ふくだ さだよし) 1917年生 哲学 『めらびりあ』『〈面白さ〉の哲学』
- 竹内 好 (たけうち よしみ) 1910年生 中国文学 『鲁迅』『国民文学論』
- 藤田 省三 (ふじた しょうぞう) 1927年生 政治思想 『天皇制国家の支配原理』『転向の思想史的研究—その一側面』
- 篠田 一士 (しのだ はじめ) 1927年生 文芸評論家 『詩的言語』『日本の近代小説(正・続)』
- 中村 雄二郎 (なかむら ゆうじろう) 1925年生 哲学 『バスカル』『感性の覚醒』
- 由良 君美 (ゆら きみよし) 1929年生 英文学 『椿説泰西浪漫派文学談義』『言語文化のフロンティア』
- 丸谷 才一 (まるや さいいち) 1925年生 作家・文芸評論家 『たった一人の反乱』『後鳥羽院』
- 埴谷 雄高 (はにや ゆたか) 1910年生 作家・文芸評論家 『闇の中の黒い馬』『死霊』
- 芳賀 徹 (はが とおる) 1931年生 比較文学 『大君の使節』『優しい旅人—渡辺崋山』
- 谷川 俊太郎 (たにかわ しゅんたろう) 1931年生 詩人 『散文』(エッセイ集) 『定義』(詩集)

## 岩波講座 文 学 3 言 語

第3回配本 (全12巻) ¥1700

1976年2月10日 第1刷発行 © 岩波書店

発行所: 〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 株式会社 岩波書店

電話 03-265-4111  
振替東京 6-26240

印刷・精興社 製本・松岳社青木製本

岩波講座  
文学  
3

目  
次

## I 言葉とはなにか

- 1 言葉とは…………… 寺田透…………… 三
- 2 言葉と社会…………… 田島節夫…………… 二四
- 3 ヨーロッパの言葉、日本の言葉…………… 西本晃二…………… 三〇  
——動作と動作主体の関係を中心として
- 4 時代の危機と言葉…………… 足立和浩…………… 三三
- 5 現代言語論のひとつの方向…………… 宇波彰…………… 三六
- 6 現代言語論への批判…………… 竹内成明…………… 三三

## II 日常の言語と文学の言語

- 1 文学言語の^意味Vと価値…………… 竹内芳郎…………… 三六
- 2 言葉の実用性と表現力…………… 福田定良…………… 一七

3	レトリックとは何か ——その批判的考察	竹内好	一七
4	詩的言語	篠田一士	一六

### III 創造の言葉と認識の言葉

1	言語表現の可能性と不可能性 ——創造の言葉と認識の言葉	中村雄二郎	二九
---	--------------------------------	-------	----

2	認識の文体、創造の文体	由良君美	二四〇
---	-------------	------	-----

### IV 言葉によってつくられるもの

1	言葉で作る世界	丸谷才一	二六五
---	---------	------	-----

2	抽象的なものの現実性	埴谷雄高	二六九
---	------------	------	-----

3	言葉の中の個と歴史	芳賀徹	三〇〇
---	-----------	-----	-----

4	言語から文章へ	谷川俊太郎	三六八
---	---------	-------	-----

I  
言葉とはなにか





# 1 言葉とは……

寺 田 透

ポール・ヴァレリーが前世紀の末から死の前年一九四五年まで、毎朝夜のひきあけ、世間のわずらいの兆さぬ時のまに書いた莫大な手帖の山を遺していったことは、すでにひろく知られている。

それを題目別に整理して印刷に付するところまで漕ぎつけたシドニーのニュー・サウス・ウェールズ大学のジュデイス・ロビンソンという女の先生がいる。(ジュデイスというのだから多分女だろう。)

そのうちの『言ランガイジュ語』という項目の、むしろ冒頭と言っていい第二章句は、「予備的命題」(あるいは「先行提案」という表題を持つが、その第一節にこうある。

言語をそれ自身として研究することは出来ないということ。

言語を特殊な、いうところの心的環境におく必要。(tom. I p. 142)

このことに気づかずに、ことばについていくら長広舌を弄しても、すなわち、言語とそれにかかわる現象を外的なものとしてのみ扱い、平気、どころか手柄顔でいたのでは、言うところは社会時評、風俗時評、文芸時評の範囲を越えないだろう。言いかえれば同じものごとを生きる同時代人としては別に読む必要もないものにすぎないということになる。自分で少し丁寧に反省してみれば誰にも言えることだからである。

そうはいうが、しかし言語はこれを各民族・部族語のような集團用語に限定してみても、(そういう限定のできるのはフランス語ばかりで、イギリス語の場合は不可能だが)、ひろく言語としてみても、それを論じようとしている自分ばかりでなく他の無数の人々がそれを使える——了解し了解させることのできる——ものである以上、これを外的存在でないとはなんとも言いえない。

のみならず言語をそうして外的存在として扱う態度はより容易であり、言語に対する特別の敏感さや、内的現象に対する厳正で聡慧な識別能力を具えていなくても可能な研究態度であるため、ひとはまずこの方面から言語を観察し記録することを開始する。すなわち異民族・部族の耳馴れぬことばに対する好奇心の発露と、穿鑿の成果を語った古くからある記録はその証拠である。

十九世紀になってからもそれはなお同じだったと言ってよく、言語学的業績は文明の程度や質のちがう遠い民族や部族の言語生活に対する研究か、よしんばオランダ乃至スイスとフランス程度のあまり距離のない言語生活圏同士にしても、相互に多少の相違や異和の感ぜられるもの同士の研究として行われつづけた。同語族間に見出される相違はとりわけ好餌で、比較音韻論、比較文法はそうして成り立ったものだろう。

一番安易な、面白おかしい話の種程度の言語談義と、一番客観的、法則的、科学的な言語論は、かくて同じ基盤の上に成立したと言える。

自分の属する民族の古代語についての研究考察もあえて言えばこれの一変種に他ならないし、自分を批評の圏外に置いての同時代の言語様式、言語風俗に対する批評も、性格上、あまりそれと違わない。

われわれ——単に言語研究者でも単に言語風俗批評家でもなく、言語による表現のしごとに従事するもの、表現というしごとによって、単に機能して終るものでなく、実在として残るものを生み出そうとする人間は、それとは別に、

自分ら自身の言葉についての考察を、さらに大事なことは、発見を、それをもまた表現の名にふさわしい形で、言い現し、書き残さねばならないはずである。

言いかえれば、拙劣粗悪な修辭に対する時論的批評や、すでに死体となった人間を研究する解剖学者の態度で遂行される言語研究、あるいは、言語現象(そのものでなくそれ)に関する法則をこねくりまわす哲學的言語論は、われわれのなすべきことではないということである。

ヴァレリーが同じ手帖ですでに今世紀に入ってから、

われわれが言語を前にして立つ有様は、自然の形すなわち可視の形を前にして絶望するばかりで、しなければならぬのは造り上げることであり、受身でいることではないとは気づかぬ石器時代の幾何学者のようなものだ。

幾何学的直線その他の発明以前の……(II 583)

と言っているのは、同時代における独裁の猖獗を苦々しく思いながら、誰しもひとは独裁者をひとり自分のうちに持っていると言ったヴァレリーの明敏誠実な自意識から説明されることで、幾何学者に出来たのは、結局自然を征服し、自然の外に、自然を材料にしながらにせよ、非自然を造り出すことだけだったではないかと反問できる種類の問題提起である。

ヴァレリー自身やがて次のように考えねばならないのだ。

諸言語の研究のための第一の条件——それは、一つの新しい言語——心象にじかに張り合わされる一つの記録様式、これを発明するためにとるべき状態に身を置くことである。(しかし心象というのも、それ自身言語である)「というのは、両義に解しうるが、今、心象は現実存在そのものではなく、人間に属するもので、ただある限定された現実存在を人間に指し示しうる非実体的なものであるの意に解釈する」。この点に注意しなければならぬ

い。

博言学者の示すことすべては、この再設立——あるいはむしろ設立すべき、原初的立場を欠いては、なんの役にも立たない。(というわけは言語を研究するとは、正しくそれをもう一回作ることではなく——まず最初大した意識は持たずに作られたものを、意識をもって、作ることだからである。〔しかしこれはまた別のもっと前の考察を持って来て理由づけすることのできる考えだとも言えよう。「現実存在に近づけば近づく程、ひとは話し言葉<sup>ワグ</sup>を失う。一つの対象は、それより図体の大きい、言葉にはあらわされぬ変形作用の多数性をあらわす記号にすぎない名辞——乃至暗喩、乃至構文による他、言い現しえないものである。現実存在は変形しえない。〔原文改行〕一つの対象につけられた名辞は、それ(あるいはその観念)に対してひとが作用を及ぼさせうるもっとも簡単な暗喩の符牒なのだ。〔原文改行〕現実存在はその恒常性によって確固不動の土台を形づくる。〔II 554〕すなわち、言葉を、その指示乃至表示機能及びその発生機構から切り離して論じ、研究するのは意味のない努力、単なるおしゃべりだということになろう。〕(下略)(III 654)

対象から切離された言葉について語る人間にはいくらでも大言壮語、美辞麗句が許される。しかし言葉を対象との関連の下につねに考えようとするなら、それがあるもの、またはあることの名辞として与えられているとは言っても、それはそれらのものやことにじかに与えられているのではなく、それらに関する人間の意識、さきほどのヴァレリーの表現を用いれば心象<sup>イマジネ</sup>、さらに形ないものについてならその認識に与えられるにすぎないという事実<sup>ファクト</sup>にひとはいやでも当面する。

ところがこの心象、意識に宿る影、乃至認識は、全く質量のない、抵抗(はあっても抵抗)力はない存在であるため、これを研究し、論じようとするひとの作為が、どんなにそれを変容、変質させるか、どんなに惧れても惧れ足りるこ

とはないということにひとは気づかねばならぬ。

言葉もそれを享けて、音につけ意味につけ、何気なく使っているうちは明確に安定がとれているようであるのに、いざそれらについて明確な知識を持つとうとして、改めて観察の対象にすると、観察の時間が長ければ長い程、言葉は万華鏡さながらの変貌を、(音につけ意味につけ)つづけてやまないことをひとは知るだろう。

のみならず言葉を明確に固定された対象であるかのように考えるのにもっとも都合のいい、それを名詞の単語の範囲で扱うやり方も、生きた言葉は単なる単語の集積ではないという事実によって、まず嘲弄をあげせられる。本居宣長も、玉勝間で「すべて言は、しかいふ本の意と、用ひたる意とは、多くはひとしからぬものなり」と言っている通り、名詞の単語は、それをどんなに語義論的語源学的に精密に究明規定してみても、それに生命を与える動詞と組み合わされると、たちまち様子が変る。

たとえば「われ神を愛す」と言ったときの神は、「神鎮まります」と言うときの神ではないし、「敬神の念篤い」と言うときの神は、一神教の神ではありえない。

名詞が単語だけで用いられるときも、実際の表現の中では、それは対格だったり与格だったり、属格であることさえあり、格語尾変化によって現勢化されるはずの機能的差異を帯びさせられている。「どこへ行くの」「海」。「これはなんの実ですか」「桑」等々。

こういうところから言葉について論ずることの困難がはじまり、その論は名調子ではやれないという事態が起り、ひとはそのために苦しむ。

言語は私に対して受身であり、また私を受身にする。私はそれを私の見解に合せて折り畳んだり、またそれが私の見解を変形させたりする。(Ⅲ 654)

とヴァレリーが書いたのは、こういう言葉の性格に触れた観察である。しかし、

内界で囁かれ聞かれる単語によって、私は自分の思念、自分の所有、自分の可能を探索する——一語一語と、私は自分自身をたどり経めぐる。それらがないと、内界においては何一つ明確にならないだろう。

それは何十億という経験のあいだに、ほとんど常に繰返し見出される何千という触り手のようなもの——神経組織の神経組織のようなものである。

一つの問題に専念し、それについて省察するとは、内界における数々の同一単語に帰るということだ。それらによってすべての顕在するものが、書き移され、質を変じて、既得のものとなる。

〔しかし〕すべて既得のものは、いわば同時の形で、直接、かつ部分的な反乱を身に受ける。(二九一年番外)

以上僕自身の観察に縋い合わせて、ヴァレリーの未刊手帖からの訳出引用を重ねて来たが、これだけではまだほんの序の口を見ただけにすぎず、引用したい箇所はこのあといくら残っているか知れないが、しかし言葉について考える作業が、いかに一つことを考え、乃至見つけたと信ずると、その場ですぐ反対のことを見、考えなければならぬしごとかということの証言者が、他にもいるということを明らかにするためには、右の引用だけで十分だろう。

ひとは(かれが敏感なら)言葉について何かを言って自己矛盾を犯さないわけに行かないのだ。

それは言葉が空気のように、というが空気よりもっと捉えどころのない、しかし遍満する実在としてそれを使わずには生きて行かれないものであるのに、というより行かれないものだからかえって、一通りや二通りでない使い方それを扱っているために起ることだと言えよう。

われわれは言葉全体に対して厳密な態度をとったりいい加減だったりするばかりでなく、一つ単語をもいい加減に

使ったり厳密に使ったりして暮している。

そのことと無関係でないこととしてこういうことがある。すなわちわれわれは言葉乃至言語一般を使い、聞き、読んでいくわけではなく、特別の単語、語句、文と関係して言語生活を営んでいるのだということ。

われわれは「無の自覚的限定」という言葉と、「雑巾雑巾」という言葉を同じ性質の意識では使っていない。少くも前者に対しては、後者に対するときより、それをはるかに意識的に、それが前後の言葉とのつながりに対して持つ関係をよくよく見定めてから使う、肯定的に使うにせよ、揶揄的に使うにせよである。

すなわち「無の自覚的限定」と「雑巾雑巾」は、言語として同列には論ぜられない、あたかも質的に違う二つの名辞であるかのようなのである——実際に使う場面から引き離して、単に言語として眺めれば、全く甲乙のない存在であるにもかかわらず。

両者いずれもそこにはないもの呼び出すために用いられる名辞に他ならないが、実質的なものを呼びよせる言葉がここでは非実質的で、非在を呼び出す言葉がかえって実質性を持たされるといふ奇怪な差異が見出される。

それと同じなのが、文学上のいわゆるスタイリストの言葉で、それは繊弱な(洗練されたと言ってもいい)中味に対して、不愉快な位に重く、幅ったく、あるいはきらびやかなものに感ぜられるが、元来質量のない言葉について、こういう感覚的な、量的な性質印象はありえないはずなのに、そう感ずることがあるのは、実際に使われている言葉が、そのあらわすものと、相伴ってしかありえないということに基いている。

文字の場合でも、その意味乃至心象は、それがわれわれのうちに引き出したり、呼び起したりするものに他ならぬ以上、両者のあいだに容態の相似がなくてはならなさそうなのに、それが無い。意味はこれだけのことにすぎず、心象はこういう色彩のものだということが、文字とは別に、われわれによって、内界とも外界とも言えない独特の空間

に認知される(認知されたと信ぜられる)。

そうでない場合もあり、われわれが追思考し、追感覺する著者によって表現せられたものと、かれがそのために用いた文字とのあいだに見事な一致が成立し、文字がなんの障害も、自己主張もしないこともないではない。(恐らくそれには、用いられた文字が表意文字か表音文字か、それぞれのその完成度がどの位まで行っているかが関係して来て、——中国人が漢文を読む場合は別のはずだし、中国でも散文という言葉は比較的新しく、その出典は明代に求められるにすぎないらしいということもあるが、——われわれ日本人にとっては漢文はついに散文たりえず、たとえ字数韻律の規格のない古文でも、拍子をとり節をつけて読むのが自然であるようなものだった。

われわれが平安女流の文学に非常に純粹な散文を見出す思いがするの、かの女らが主にひらがなによって書いたためだという一面もあるのではなからうか。

ローマ字で書かれた——というより正確には活字体ローマ字で印刷された——西ヨーロッパの論理家の文章より、字画が極端に言えば七華八裂とさえ言えるギリシャ文字で書かれた散文の方に、より散文性が感ぜられるのも、同時に思いあわさるべきことだろう。

僕がここで言っているのは、解放する文章形態としての散文と、支配し誘導する文章形態としての韻文ということだが、こういうことも言語をただ言語として論じていたのでは開けて来ない局面だろう。

しかも言語は、特定の単語、語句、文章の形でしかわれわれと関係しないという条件と、もう一つ、それがわれわれの言語であるためには、それらはさらに特定の情況や個人の条件によって歪みを与えられ、色どられた用い方でしかわれわれのものにならないという条件が、ますます言語一般を架空の、と言ってわるければ、わざとしくまない限り、存在しない考究対象にする。



それは実在はするが、研究や考察の対象としては、でっち上げられたものだと言いかえることもできよう。

言語という名辞、観念には、自然という名辞、観念に似たところがある。

われわれが見、感ずる自然は、実はある山、ある川、どこかの海、いづれかの岩、地面、樹木、何年何月何日何時分かの日の光、月の光、風などにすぎないのに、自然という名辞や観念を疑うものはひとりもいず、それはあると信ぜられている。それと同様のことがここにもあるのだと僕は言いたい。

だから、自然の懐へ、とか、自然を尊重しよう、などと御機嫌で叫べるのと同様に、言語論が横行する。

ヴァレリーにしても、すぐる大戦中、フランス人のうちにフランス人であることの自信を育成するためでもあるかのように行っていたいくつかの講演の中でフランス語について述べたその言説は、所詮、こういう外的問題提起にすぎなかったし、それ以外ではありえなかった。

そのヴァレリーが、最前写した章句のすぐあとで書いている。

私はフランス語で考える——すなわち、私のうちに、私の直接の、現実の、翻訳されたのでない、諸現象を直接喚起し——またそれらによって一語同義維持的に喚起されるのはフランス語の単語である。これらの記号ともろもろの心象のあいだでは、直取りきが行われる。(Ⅲ 734)

僕は、日本語で考えている。だから日本語で考えるということにつれて起る「僕の〔内的〕諸現象」と、僕の「直接の、現実の、翻訳されたのでない諸現象」が僕のうちに呼び起す日本で育って来た日本語の問題について考えるべきだろう。(それにしても「諸現象」とは、内界とも外界とも言いきれない空間の、隠微で繊細で錯雑し、しかも身軽な出来事を指示するための、なんと手荒な単語だろう。)